慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Goethe : Dämon, (od.das Dämonische) : Mephistopheles : Gespräche mit einem Stern
Sub Title	
Author	越塚, 信行(Koshizuka, Nobuyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.167(12)- 179(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Goethe—Dämon, (od. das Dämonische)—Mephistopheles.

＊ Gespräche mit einem Stern ＊

越　塚　信　行

1. Goethe と Dämon, das Dämonische.

「一月一日附けお便り拝受，喜びと悲しみを届けてくれました。お便りに対してはこう申し上げられるだけです。わたしにはたゞ一つの存在（Existenz）しかない。これを今度はすっかり賭けてしまい，いまなお賭けつつある。心身ともにわたしが脱出に成功し，私の天性，精神，幸運がこの危機を克服すれば，償わるべきものは千倍にもしてお返ししよう，と。——死ぬものなら死ぬもよし，何れにせよ，こうでもしなければ，わたしはもう何の役にも立たなくなっていたのですから。」

Goethes Brief an Charlotte von Stein. Abends 20. Jan. 1787.

婚約者 Lili にも知らせず，漂然としてスイスへ旅立った十余年前と同様に，Goethe はイタリア旅行の際にもその出発を最愛の人 von Stein 夫人には知らせずに，ひそかに故国に別れを告げた。

その最愛の人に送られたこの書簡に見られる，一面冷酷無惨とも思われる素気ない表現は，然しながら，彼の愛の一つの特徴を示すものでもある。というのは，彼の愛はその対象の如何に拘わらず常に全人格的であり，それが有夫の婦人であろうが，清純な乙女であろうが，移り気な下町娘であろうが，恒に渝るところがなかった。すなわち，Westöstlicher Divan 中の Buch Suleika に示される様に，彼は＜一にして二，二にして一＞の境地に於て全存在を挙げて対象に没入して之を愛し，対象自体が既に彼の存在の一部と化してしまうのである。従って，彼はその愛の対象に対しても自分を同様に愛することを無意識に要求する。その好箇の例は Käthchen の場合であり，問題のスイス旅行中に作られた，「山上より～」と題する Lili への思慕の情を美しく歌い上げた，

古今東西を通じての佳品ともいうべき，愛すべき小詩によく現われている。

Wenn ich, liebe Lili, dich nicht liebte,

Welche Wonne gäb' mir dieser Blick!

Und doch, wenn ich, Lili, dich nicht liebte,

Wär', was wär' mein Glück?

—Vom Berge in die See—

これほどに激しく愛するが故に，彼は当然相手も自分を同様に愛し，自分の気持を理解してくれる義務がある。と無意識に信じ込んでしまうのである。それ故，自らの存在，自らの愛に対する厳しさは，そのまゝ対象に対しても直接に要求されるものとなり得る。そこでは既に自他の区別はなく，文字通り<二にして一>であり，驚くほど冷厳な彼特有の自己凝視の眼は，両者に最も純粋なものを要求することになるのである。この世の絆を一切断ち切った境に於て，彼はその愛の純粋さを確めようとする。それが叶はないとき，往々にして「逃避」と呼ばれる Goethe の諦念の表示が為される。然しながら「逃避」乃至は「逃走」というのはこの場合決して適切な表現ではない。強いて名づけるならば，それは「絶望への逃走」である。純粋性を保たんがための愛の自己放棄と呼ぶのが寧ろ正当であろう。Friederike, Lotte の場合などはその代表的な例であるが，Lili の場合もやはり同様の意味合いから解釈さるべきである。

この様な場合，人は Goethe の変り身の鮮やかさ，転身の巧みさということについて語るが，そこには必らず，幾分かの羨望，感嘆，或いは軽い非難の気持がこめられているのが常である。もっと直截的に云えば，彼の狡さというものを彼等は言外に仄めかすのであるが，実はその様な批評は，常に Entweder-oder の道を歩んでいた Goethe の身を置いていた限界状況を理解し得ぬ為の偏見であると云わねばなるまい。

イタリア旅行が既にその様な限界状況に身を置いて初めて為されたものであり，彼は上述の書簡に記した通り，その唯一つの存在（Existenz）の全てをこの一挙に賭けていたのである。

今となっては Goethe に喜びと悲しみを齎らしたという一月一日附けの Von Stein 夫人の書簡に何が述べられていたか，知るよすがとてもないが，何れにせよ，この Goethe 自身の書簡に見られる激しい決意の底に流れている dämonisch なものが，彼にあっては常にその生活と，生活の表現である作品に，何らかの形で影響を及ぼしていたことは治く知られている事実であり，Goethe 自身もそれを認めている。

すなわち，Goethe は das Dämonische（デーモン的なるもの）についての対話に於て，Eckermann に次の様に語っている。

「デーモン的なるものは悟性（Verstand）や理性（Vernunft）では理解出来ぬものである（nicht auflösen ist)。私の天性（Natur）の中にはそれはないが，私はその支配を受けている。」

Eckermann: Gespräche mit Goethe 2. März 1831.

天性の中にはないが，然しその支配を受けている（aber ich bin ihm unterworfen）と云わねばならなかったところにわれわれは重要な意味を見出すのである。それは，或る時 Goethe がやはり Eckermann に語った言葉の中に，彼自身努めて das Dämonische に近着かぬよう心掛けていたことが見られ，更に，das Dämonische は恋愛に於て顕著に現われるものである。と語り，加えて，彼が「ペリカンの様に自らの心臓の血で書いた」と称する Werther を二度と再び読まない理由として，あの病的な雰囲気（der pathologische Zustand）に触れるのが恐ろしいからである。と説明しているのは，老年に至っても尚，あの Sturm und Drang の情熱謳歌時代の激しい dämonisch なものが，詩人の血の中に流れていたことの証左に他ならず，実際74才の彼が19才の乙女 Urlike に寄せた想いを歌った Marienbad の Elegie は，この事実を雄弁に物語るのである。

のみならず，彼自身，自作の詩 Urworte. Orphisch の中の *Δαιμων*, Dämon について説明しているところをみれば（Kunst und Altertum. 1820）

この Dämon なるものは

1）先天的な個性であり，他者との近似性にも拘わらず，明瞭に他者と区別される特性であること。

2）これは誕生の星の運行に譬えられるものであると同時に，その個人の運命を決定し，個体を不変のものとし。

3）更にまた，その個体が有限体としては亡びることはあっても，その核心が凝集している限り，幾世代を経ようともこれが亡びることはない。

というのであるから，Goethe 自身この Dämon を信じ，又その目に見えない力によって動かされていた事実を認めていることになる。

Frankfurt の Gretchen との出遭いに始まり，Käthchen, Herder, Friederike, Merck, Lotte, Basedow, Lili……と，男女を取り交ぜて重大な人生の転機を彼に齎らした人々の名を今更列挙するまでもなく，彼はこの運命の星——誕生の星——によってその生涯の

危機を切抜け，成長し，同時に秀れた作品を生み出したばかりでなく，更に，Weimar への移住，イタリヤへの旅行……と枚挙に遑のない程多くの事件が，彼を高みへ高みへと誘なう運命の星の導きによって生起したのである。

それは或いは時に偶然とも云えるものだったのかもしれない。が，彼はそれをも屢〻必然化したのである。

われわれがその様に考えるばかりではない。恐らくは彼も亦，Frauenplan の静かな自然に包まれた Gartenhaus の粗末な寝台にひとり横たわって，一日を，一年を，そして生涯を省みるとき，必らずやこの運命と偶然ということに就いて考えたに違いない。

世界の隅〻からひっきりなしにこの世界最大人の詩を一目見るために集まって来る訪問客の群，堅苦しい儀式張った官廷での生活，賑やかな劇場や音楽会の集い，加えて，嘗ては彼をその生みの親と讃えたにも拘わらず，今では最も激しい攻撃者となった浪曼派との無用な闘い——彼には孤独を楽しむ時間さえなく，病もまた屢〻内心の焦立ちを昂めた。而も尚，彼は毅然として立たねばならなかった，Weimar の宰相であり，世界最大の詩人であるがゆえに。

何故かくあらねばならぬのか——

“誰もが自分の家の前を掃け

そうすれば街のどの区も綺麗になるのに”

—Bürgerpflicht, Den 6. März 1832 (Sprüche VII)

彼は極めて平凡な言葉で彼の気持を表明した。だがその真意は誰にも理解されない。

何故そっとしておいてはくれぬのか。既に彼も，Karl August と共に，或いは馬に鞭ち，或いは馬車を駆って山野を駈け廻り，挙句のはては渇を癒す為と称して旗亭に立寄り，青春を謳歌して盃を傾けるのが常であった，Weimar 初期時代の様な頑健な体力は持っていなかった。

一人で静かに考えてみたい。誰にも煩らわされずに自分の仕事を完成させたい。彼の考えていたのはそのことだった。そして，恐らくはその結果として生れたのが，彼の《偶然論》であった。

すなわち，前述の，確固不抜のたゞ己れ自身からのみ発展する本質が，種々の関係に入り，之によって本来の根源的性格が活動を妨害され，その志向するところを阻まれる——そこに生ずるものを彼の哲学は《偶然》と呼ぶのである。

彼にとっては，従って，星とは運命の星，天体の運行（それは恒に規則正しく，Faust

の Prolog im Himmel でも述べられているように，神の栄光を讃えつゝ軌道を永遠に活動し続けるものである）に従う確固不動のものであるのに反し，偶然とは，たまたまこの予定された軌道に落ち込み，これと衝突し，これを破壊しようとする，無軌道な流星若しくは気紛れな隕石の類いを指すのである。

彼にとって流星や隕石は必要ではなく，従って，これ等に対しては頑なに心の扉を鎖し，Weimar の Jupiter の仮面をつけた。が，運命の星と星とが交わる軌道を持つとき，彼は仮面をかなぐり捨て，驚くほど卒直にその胸襟を開き，Wertherの詩人，Faust の作者に帰って，十年の知己の如くにこれを迎え入れる。

「人は高貴であればあればあるほど，ますます Dämon 達の影響を受け易い。従って，自らの指導的意志が傍道に外れないように只管注意せねばならない。」と Goethe は語り，更に附け加えて，「私と Schiller が知り合つた際にも全く dämonisch な何かが支配していた。」と Eckermann に向って回想しているのは，この間の事情をよく説明しているものと思われる。

1794年6月21日 Jena での自然科学の講演会の帰途，それまで互いに反撥し合っていた両詩人が（尤もこれは Goethe の側の要心深さが主たる原因であったことは周知の事実であるが）忽ち旧知の如く手を執り合い，爾来1805年 Schiller の歿するまでの十余年間，Goethe が彼を自らの半身の如く遇した事実も，この間の事情を説明して余りあるものであろう。その同じ軌道を歩む二つの星の結びつきが如何に重大な意味を持つものであったかは，Goethe 自身にもその瞬間すでに充分予感されていたに違いない。従って，喜怒哀楽の情を殆んど外に現わすことのなかった彼が，Schiller の死を予感した時，部屋の外にも洩れるほど声を挙げて泣いていたということも当然首肯出来，親友のものとは云え，その頭骸骨を机上に飾っていたという常軌を逸した様な行為も納得し得るのである。恐らく Faust も Schiller と Eckermann の奨めなしには完成されなかったであろうが，それにも増して，根源的に，Schiller は Goethe の存在を支える柱であり，何よりも，軌道を同じくする選ばれた運命の星だったのである。

この様に見てくる場合，《詩と真実》開巻冒頭の，考え様によっては聊か物々しい感のないでもない著者自身の誕生日の天体の運行に関する記述を，若し読者が老人に有り勝ちな神秘捏造（ミステイフイカシオーン）と受け取るならば，それは Goethe の意図したところとは遥かに遠いものであるに違いない。それを何よりも明確に物語っているのは，根源現象に関する彼自身の言葉である。

「私が結局，根源現象で満足するのは，畢意諦めに過ぎない。が，人間性の極限で諦めるか，私の偏狭な個我の仮設的制限内で諦めるかでは，雲泥の差である。」

Goethe: Maximen und Reflexionen. 577.

この諦念（Resignation）は，従って飽迄 passiv なものではなく，探求し得るものは究めつくし，究め得ざるものには畏散の念を以って対する敬虚な詩人のそれであり，それ故彼は更に，その「永生の確信」に就いても次の様に語っている。

「我々の永生に関する私の確信は活動性の概念に基く。何故なら，我々が終生不断の活動を続けた場合，現在の存在形態がこれ以上私の精神を支え切れなくなれば，自然は私に別の存在形態を与える義務があるからだ。」

Eckermann: Gespräche mit Goethe. 4. Feb. 1829.

更に Faust からその一節を引用すれば，事情は一層明らかになろう。

馬鹿者だ！　空を仰いでは眼をパチクリさせて
雲の上の方に自分と同じ様な者が居ると思い込む奴は！
それよりしっかり足を踏みしめ，自分の周りを見るがいゝ
偉い奴にはこの世界は隠し立てはせぬものだ。

Faust Z. 11443～6

従って，之等の言葉を思い合わせれば，既に述べた《詩と真実》冒頭の記事に接する時，人間性の限界の極点まで努力を続けて息まなかった彼にして，尚運命的なものを感ぜざるを得なかったことにこそ，われわれは人生の不思議さを念うのである。

2. Mephistopheles と Dämon, das Dämonische

然し乍ら，以上述べたものゝみが Goethe のいう Dämon 乃至は das Dämonische ではない。何故ならば，彼は他の場処でやはり Eckermann に向って「意地の悪いデーモン達—böse Dämonen」或いは「妨害をするデーモン達—retardivende Dämonen」という表現を用いて語っているからで，これは明らかにギリシヤ時代の Δαιμων 或いは Δαιμωνιων を意味するもの，即ち半神（Halbgott）であり，人間と神との中間的存在として，Homeros や Pindaros の考えていたものと同根の種属のそれであると考えられる。

元来ギリシヤ語で用ひられた Δαιμων は現在用いられている様な意味ではなく，Olympus の神々を指すものであったのが，いつか半神的要素が強くなり，超自然的な存在を意味する様になり，時には人間の守護神ともなり，時には人間に害を及ぼすものと

もなったのであるが，もともと神性の表現であったものが次第に energisch なものへと転換され，次第に具象性を失って Macht として意識されることになったものと考えられる。この様な変化の過程はギリシヤ個有のものゝ他にヘブライ的要素，キリスト教的世界観などの諸因子の影響なども認められるであろうし，Goethe 自身 das Dämonische に就て《詩と真実》第五巻廿章に詳しく述べている通り，極めて複雑で矛盾した性格が認められるのであるが，之に関しては稿を他日に譲ることにして，つぎにこの Dämon 乃至は das Dämonische と Mephistopheles との連関を Goethe 自身どの様に考えていたかについて考えてみよう。

差当ってわれわれに与えられている資料は1831年3月27日の，彼と Eckermann との対話に見出される僅か数行の詞に過ぎない。

そこでは，Eckermann が，

「Mephistopheles もデーモン的なところがありませんか。」

と尋ねたのに対し，Goethe は即座に，

「ない。Mephistopheles というのは余りにも消極的な性格だ。ところが，デーモン的なものは全く積極的な行動力の中に現われるものだ。」

といとも簡明直截に答えている。

この言葉の響きから推察されるのは，Goethe の das Dämonische を飽迄 positiv で erschaffen する Energie であるとする動かし難い根本的解釈である。従って，その様な例として，全欧を席巻した英雄 Napoleon や，小国 Weimar の内に蹋って居られなかった Karl Angust の，強烈な個性や，創造への意志，建設への精進……という様な建設的なもの及び彼等の生命力，無限の活動力への讃美を彼は口にする。と同時に，Mephistopheles の Model として重要な地位を占める Merck の様な negativ な性格を持つ人物は，非生産的であるが故に，das Dämonische とは程遠いものゝ例として挙げられるのである。確かに彼 Merck の性格は negativ であり，上掲の Goethe の言葉は彼の場合にもそのまゝ当てはまるとも云えようが，positiv でないということが，そのまゝ unproduktiv であるとは断定出来ないことは，すでに他の場処* で筆者が Mephisto の Model としての Merck 及び光と闇に就いて述べたところでも明らかである。

即ち，Merck の negativ な，辛棘な批評は，常に Goethe を reizen し，wirken させる positiv な Energie に転換されるものであったし，事実その意味で，Goethe 自身にとっても「生涯に最大の影響を与えた特異な人物」であり得たし，Mephistopheles も

同様に Faust にとっては自らを reizen し，wirken させる離れ難い伴侶だったのである。従って，この観点から〈天上の序曲〉に於ける der Herr の言葉に見られる Teufel の役割——兎角たるみ勝ちな人間の向上心を reizen し，wirken させる存在としてのそれ——を考え，更に光と闇とが（つまり，Faust 及び Mephisto によって象徴される二つの根源的な世界が）その相互作用によって無限に多彩な人生を形成してゆくのならば negativ ということ自体を単独に採上げて考えるべきでなく，飽迄それは positiv で produktiv な Energie に転換され得る dämonisch な激しさを持つものであることに気づくのである。

従って Faust 解釈に関する根本的に異る二つの見解がこゝに生ずることになる。

その一つは，人間の通有性である Polarität の象徴として Faust と Mephisto が存在し，両者がどこまでも相対立して悲劇を形成してゆくという見解であり，他の一つはその Polarität を止揚して，両極が互いに相倚り相扶けながら，壮麗な，真の意味での悲劇——divina tragoedia——を展開してゆく，という解釈である。

最初の見解に従って Faust 劇を考えるならば，この壮麗な悲劇も，市井の舞台で古くから上演されて来た人形劇や民衆劇と何等撰ぶところのない勧善懲悪的な意味しか持ち得ぬことになり，今更 Goethe がその秀れた天分と人間性とを傾注して60年もの永く貴重な才月を費す必要もなく，極言すれば，嘗て彼に手紙を送って，第二部を完成したい，と申し出た大膽な学生に後を任せても差支えなかったとも云えよう。従って，この様な立場に立っての批評も，詩作それ自体も，全く類型的なものに過ぎなくなり，Goethe の目指した典型的なものとは遥かに距るものとなることは当然考えられるところである。

Goethe であればこそ書くことが出来，Goethe でなければ書けなかったところに，この戯曲の存在する重要な意味の一つがある。それはやはり，Goethe の人間性及びその世界観の根底にあった，Polarität を如何に止揚して最も根源的な場に立って人生に処し，対象を処理するか，という問題に通ずる道を探し出すことによって解明され得ることである。

1827年5月6日，予てからその批評眼を高く買っていた Globe 誌同人の Ampère を昼食に招いた折，Goethe は Tasso 制作に当って決して一つの理念（Idee）を表わそうとしたのでないことを強調し，彼はドイツ人の穿さく好き，抽象的理念や思弁的なものを好む悪癖をたしなめ，作品からの直接の印象を素直に受け容れる勇気を持つべきである。と説き，更に Faust の中に描かれている理念については，筋の運び（Handlung）

と理念とが兎角混同されていること，賭や救済ということも全体と個々の場面の根底に特にある理念ではないこと，こゝでも一貫した理念という様なものは存在せず，彼が内心に受けた印象や直観を詩人として芸術的に完成し，形成し，他人がそれに接したとき，その儘の印象を受けるように，活き活きした表現に移したゞけである……と語り，彼の経験した豊富多彩な人生を読者がそのまゝ追体験してくれることを彼は望んでいるのである。

それ故，我々が Faust を繙き，Mephisto に就いて論ずる場合にも，その在るが儘の姿——それには幾つかの矛盾撞着があり，従って幾つかの Mephisto 像というものが存在し得る——を在るが儘に素直に受け容れ，その性格の矛盾撞着にも拘わらず，Goethe の志向した根源的なものを明らめなければならない。

単に Polarität ということのみを単独に採上げて論ずるならば，Faust は positiv で produktiv な dämonisch な性格を持つものであり，Mephisto は negativ で，従って unproduktiv な性格を持つ存在に過ぎぬものとなる。従ってこの場合後者はギリシヤ的な意味に於ける否定乃至は破壊の Dämon ということが出来よう。

而し乍ら，上来述べ来つた如く，その negativ で dämonisch な性格が，《天上の序曲》の趣旨に従って，人間を reizen し，wirken させる役目を持つと考えられる以上，更に高度な意味を持つ機能を der Herr の意志によって行なうべき存在と考えられるのである。

Goethe は磁石を根源現象の一つの現われと見ているが，最も単純化された姿に於て，S極N極に岐れた二つの極が，互いに反撥し合い乍ら，離れることなく，相倚り相扶けて一つの磁場を形成する様は，Faust と Mephisto の姿をそのまゝ象徴的に物語るものであるとも云えよう。

とは云え，さきに述べた negativ なものを positiv な，従って produktiv なものへ，という様な価値の転換を行なうのは単なる言葉の遊戯では勿論ない。

その例を "Faust" 中の有名な《書齋の場》にとって考えてみよう。

Die Botschaft hör' ich, allein fehlt der Glaube;
Das Wunder ist des Glanbens liebstes Kind.
Zu jenem Sphären wag' ich nicht zu streben,
Woher die holde Nachricht tönt,
Und doch, an diesen Klang von Jugend auf gewöhnt,

Ruft er auch jetzt zurück mich in das Leben.

Faust Z. 765～770.

自殺者の決意を不図引留めて，生へと結びつけ，結びつけただけではなく，生の価値を転換せしめるものは一体何であろうか。

聖らかな熱した受容であった少年，青年時代の Faust の祈り，そこに生れた恵みある不思議なあこがれ，千行の熱涙の下ると共に彼の為に湧き出す様に思われた新らしい世界，そして楽しい遊びや春の祭の自由な幸福——そう云った様な感動に充ち溢れた生への kindliches Gefühl というものへの回想のみが，果してその様な死と生とに対決する碩学 Faust の決意を翻すものたり得るであろうか。

若し単に過去の幼ない熱した祈りや幼児の信仰への回想というものが，仮初ならぬ一歩を引留めたというならば，次に述べられる様な死への欲求が再び Faust を訪れる筈はない。

Der Gott, der mir im Busen wohnt,
Kann tief mein Innerstes erregen,
Der über allen meinen Kräften thront,
Er kann nach außen nicht bewegen;
Und so ist mir Dasein eine Last,
Der Tod erwünscht, das Leben mir verhaßt.

Faust. Z. 1566～1571

楽しかった宴の席の想い出が純粋な幼な児の信仰にまで持込まれて，俺はつい騙されたのだ，という Faust の詞は云い逃れに過ぎない。彼を引留めたのは行蔵としての生への予感なのである。

そのことを暗示しているのは，「キリストは蘇り給いぬ。」という詞で始まる，単純ではあるが，それが反って，繰返される脚韻の，鐘の共鳴にも似た不思議に力強い響きを以って我々に訴えてくる《天使の合唱》（737～41；757～61；797～807行）であり，この合唱がこゝに置かれたことは，Faust が Jesus の人格に一つの tatvoll な生き方の象徴を感じとったことを暗示するものと考えるべきであり，そこから例の有名なヨハネ伝第一章第一節の「初めに言葉ありき」という詞の解釈の推移の象徴するところも理解される筈である。

ことば（Wort）は最も源初的な形では物の名前である。

Name ist Schall und Rauch

Umnebelnd Himmelsglut.

と称し，名付け，若しくは表現することの空しさを知る Faust にとって，ことばはこの世界の根源的なものではあり得ない。更に意味（Sinn）の世界は事物の関係を表わし，論理の世界を形成しはするが，論理の世界では現実を一寸でも動かすことは出来ない。ばかりでなく，論理自体がその存在を否定することさえ出来るほど信頼出来ぬものである。更に力（Kraft）もその主体となるべきものを欠き，正しい志向を与えられないときは徒らに秩序を乱し，破壊と混乱とを招来するのみである。そこに業（Tat）が生れて来る。業（わざ）即ち行為こそは，Schaffen であり，こゝに初めてことばも意味も力も，全てを含んで，活き活きとした現実世界での活動，創造が行なわれ，個が主体的に生きる場を獲得し，その reason dêtre を持つことになるのである。例えときをりは虚無や絶望の影の射し込むことはあっても，この生命の充実感は何ものにも増して根源的に魂の底に定着して之をゆさぶるものであり，永遠に努力して息まぬ Faust の本来的な生存への意志，創造への意欲に貫かれて，歓喜も絶望もそれが純化され，透明な輝やきを放って彼をより高い世界へと導くものであることに疑いはない。

Wort から Sinn へ，更に Kraft から Tat へとその意味を転換させてゆく為に，Faust は80年を要した。勿論この様な着想自体すでにドイツ文学史上に一時期を劃するものであったことは否めず，その意味では，この著想のみですでに Goethe はドイツ文学史上に不滅の金字塔を建てたとも云えるのであるが，それが未だ Gefühl と Tat とを謳歌する Sturm u. Drang 運動の骨子であった Titanismus の影響を受けて，建設よりも先づ破壊へとその目が向けられた事は，この部分が1797～1801年の制作であるのに Gefühl ist alles！という部分が既に Ur=Faust に現われていることゝ思い合わせれば，全体の釣合いからみて当然の勢いと云わざるを得ず，従って実際には Tat それ自体も聊か観念的であり，言葉の上では極めて卓抜した価値の転換が行なわれたにも拘わらず，第一部の Faust の Tat は，結果的には常に周囲のみならず己れ自身をさえ傷つける不毛のそれであったのも当然と云えよう。Welt und Thaten Genius たる Erdgeist の使者たる Mephisto の役割と考え併せるとき，この様な Faust の行為は彼らしからぬものと云えないこともない。

それ故，この価値の転換が真の意味で具体化され得る為には，Faust が狭い個我の領域から脱出し，広い世界に出て，高貴なものから卑俗なものまで知り尽くさねばなら

ず，更に数十年の努力を重ねて，漸くにして瞬間に向って，

Dürfte ich sagen. Verweile doch! du bist schön!

と公言し得ることになるのである。

この事実によっても知られるように，理念として把握したものを体験の裏づけによって実証するのは容易なことではない。それ故，negativ なものを produktiv なものへ価値転換するということは更に困難であることは充分首肯されよう。

Goethe にあってもそれは決して容易なことではなかったが，Mephisto の性格の中に彼の秀れた人間性はそれを鮮かに描き出すことに成功した。玆に近代的悪魔としての Mephisto の特質があり，之こそ Goethe ならでは出来ぬ至難の業だったのである。

Anmerkung

＊）慶応義塾大学藤原記念工学部日吉紀要第3，4号《Goethe の Faust に於ける Mephistopheies の性格，その2，3》

Literatur

1) Goethes Werke, 1～14, Hamburger Ausgabe.
2) Goethe: Dichtung u. Wahrheit. Aus meinem Leben, Carl Hanser Verlag.
3) G. Witkowski: Goethes Faust. Hesse & Becker Verlag. 1929.
4) Goethe=Briefe; herausgeg. Philipp Stein, Meyer & Jessen.
5) Goethes Werke u. Schriften. herausgeg. Gerhart Baumann. J.G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger.
6) Goethe: Italienische Reise. Hirmer Verlag.
7) H. Düntzer: Die Sage von Doctor Johannes Faust. 1846.
8) Dr. F. Deycks: Goethe's Faust, Koblenz. 1834.
9) Hans Schwerte: Faust u. das Faustische, Klett Verlag. 1962.
10) Walter Muschg: Goethes Glaube an das Dämonische. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung. 1958.
11) Erich Franz: Mensch u. Dämon, Max Niemeyer Verlag 1953.
12) Edard Spranger: Goethes Weltanschauung. Insel. 1949.
13) Leo Schidrowitz: Der unbegabte Goethe. Th. Kirschner Verlag Wien. 1949.
14) Hanna Fischer-Lamberg: Der junge Goethe. Walter de Gruyter. 1963.
15) J.P. Eckermann: Gespräche mit Goethe. herausgeg. H.H. Houben, Brockhaus. 1949.
16) Kanzler von Müller: Unterhaltungen mit Goethe, kritische Ausgabe besorgt von Ernst Grumach, Hermann Böhlaus Nachfolger. 1956.
17) E.M. Butler: Ritual Magic. Cambridge Univ. Press. 1949.

（その他，対話集，Handbuch の類は省略。）